

# 「現地想像超えていた」

## 京都救助先遣隊が帰京

被災地での救助活動の様子を話す司馬田さん(左)と藤木さん(16日午前9時25分、京都市中京区・市消防局本部庁舎)―撮影・水澤圭介



東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた宮城県南三陸町に緊急消防援助隊として派遣された京都市消防局の隊員が帰京し、16日、

2人が中京区の市消防局で活動を報告した。2人は「はるかに想像を超えた現場だった」と語り、現在活動中の

りでも多くの生存者を見つけてほしい」と願いを託した。消防救助課の司馬田宏さん(53)と藤木壮二さん(43)。市消防

局からは2人を含む105人が11日、先遣隊として京都を出発した。南三陸町は被害が甚大で、人口1万7千人のうち今も8千人の安否が確認されていない。

市消防局と府内の消防隊員でつくる京都府隊は海辺から300メートルしか離れていない地域で丸2日間、日の出から日没まで救助活動を続けた。

南三陸町に着いたのは13日朝。高さ2、3メートルのがれきに車での進入を阻まれ、それぞれ自力で乗り越えて現地に入った。町の建物はほぼすべてが土台から崩れ、原型をとどめていなかった。「これまでの地震の景色と全く違う。はるかに想像を超えている」。司馬田さんは未曾有の惨状に驚きを隠せなかつ

た。余震が続く。津波警報が何度も発令される。そのつど避難を繰り返しながらの活動だった。何とか建物が残っていた志津川病院と老人ホーム「慈恵園」を主に検索した。病院は3階まで浸水し、院内にもがれきが散乱していた。

藤木さんが足を踏み入れた老人ホームも同様で「施設の中に流された家が流れ込んでいた」。周辺も含めてがれきをかき分け、ロープ作戦も実施した。必死の検索だったが、生存者は見つからなかった。「後続の部隊の救助は続いている。活動を見守りたい」。2人は無念さをにじませる。

先遣隊は15日早朝に第2陣と交代し、16日午前5時に京都に帰着した。疲労と心労のため、記者会見は15分に制限された。2人の目は赤く充血しており、疲れ切った表情だった。(堀田真由美)